

## 『ラクシュミー・タントラ』 第3章訳註

三澤 祐嗣

## 1 はじめに

『ラクシュミー・タントラ』 (*Lakṣmītantra*、略号: LT) は、ヴィシュヌ派の一派であるパーンチャラートラ派の主要な文献の一つであり、およそ9世紀から12世紀の間に編纂されたものとされる。本稿は「『ラクシュミー・タントラ』 第1章訳註」(『東洋大学大学院紀要』 第49集、2013年、pp. 129-150) および「『ラクシュミー・タントラ』 第2章訳註」(『国際哲学研究』 第3号、2014年、pp. 175-186) に続くものである。第3章の和訳を試み、適宜註解をつけ、その内容解明に努める。

## 2 凡例

1. 底本は *Lakṣmī-tantra: A Pāñcarātra Āgama* (Edited with Sanskrit gloss and introduction by V. Krishnamacharya, Chennai: The Adyar Library and Research centre, 1959) を使用した。
2. 翻訳に際し、Sanjukta Gupta の英訳 *Lakṣmī Tantra: A Pāñcarātra Text* (Delhi: Motilal Banarsidass, 2000) を参照した。
3. 各偈(シュローカ)は、原文、試訳の順に記し、註は文末に記した。
4. 翻訳中の〔 〕は訳者が内容を理解しやすくするために補った部分であり、( ) は訳者による補足的な説明である。

## 3 『ラクシュミー・タントラ』 第3章 「3つのグナから成るものの明示」

Śrīr uvāca —

シュリーは語った。

nityanirdoṣaṇiḥśīmakalyāṇaguṇaśālinī /

aḥaṃ nārāyaṇī nāma sā sattā vaiṣṇavī parā // LT 3.1

わたしは、恒久で、汚れがなく、計り知れなく、世のためになるグナ(属性)<sup>1</sup>を持つものであり、ナーラーヤニーであり、実にかの最高存在であるヴァイシュナヴィーである。

deśāt kālāt tathā rūpāt paricchedo na me smṛtaḥ /

saṃvittir eva me rūpaṃ sarvaiśvaryaḍiko guṇaḥ // LT 3.2

空間、時間、そして形態によって限定されるとわたしが語られることはない。「知」(saṃvitti)<sup>2</sup>のみがわたしの形態(本質)であり、あらゆる「自在力」(aiśvarya)などはグナ(属性)である<sup>3</sup>。

svasvātantryavaśenaiva vibhāgas tatra vartate /

vijñānaiśvaryaśaktyātmā vibhāgo yaḥ sa īritāḥ // LT 3.3

自己の意欲 (svātantrya、独立性) によってのみ、〔グナの〕 区別 (vibhāga) は、そこに生じる<sup>4</sup>。〔グナの〕 区別は、「知識」(vijñāna = jñāna)、「自在力」(aiśvarya)、「潜在力」(śakti) から成るといふこと、それが言われた<sup>5</sup>。

vijñānaiśvaryaśaktīnām unmeṣas tv aparō 'dhunā /

atarkeyā māmodiyatya niyogānarhayā sadā // LT 3.4

icchānyat kṛtam rūpam āsī jñānādike trike / LT 3.5ab

しかし、今、開眼 (unmeṣa) は、「知識」(vijñāna = jñāna)、「自在力」(aiśvarya)、「潜在力」(śakti) とは別である<sup>6</sup>。常に、押し量れない者であるわたしの自由自在な生起 (創造) の意欲 (icchā) によって作られた別の形態は、「知識」(jñāna) などの3種の中に存在する<sup>7</sup>。

yathāivekṣurasāḥ svaccho guḍatvaṃ pratipadyate // LT 3.5cd

tadvat svaccham ayaṃ jñānaṃ sattvatāṃ pratipadyate /

rajastvaṃ ca mamaśvaryaṃ tamastvaṃ śaktir apy uta // LT 3.6

まさに、澄んだサトウキビの汁が糖蜜性を獲得しているように。そのように、この<sup>8</sup>澄んだ「知識」(jñāna) は、サットヴァ性を獲得している。そして、わたしの「自在力」(aiśvarya) はラジャス性を、そしてまた〔わたしの〕「潜在力」(śakti) はタマス性を〔獲得している〕<sup>9</sup>。

ete trayo guṇāḥ śakra traiguṇyam iti śabdyate /

rajaḥpradhānaṃ tat sṛṣṭau traiguṇyaṃ parivartate // LT 3.7

シャクラよ。これら3つのグナは、3つのグナから成るもの (traiguṇya) <sup>10</sup> と呼ばれる。その3つのグナから成るもの (traiguṇya) は、創造において、ラジャスが第1のもの (優勢) となる。

sthitau sattvapradhānaṃ tat saṃhṛtau tu tamomukham /

ahaṃ saṃvinmayī pūrvā vyāpiny api purāṃdara // LT 3.8

それ (3つのグナから成るもの) は、維持において、サットヴァが第1のもの (優勢) に、一方、還滅において、タマスが前面 (優勢) に〔なる〕<sup>11</sup>。わたしは、「知」(saṃvid) からできている者であり、最初の者であり、遍充する者である。ブランドラ (城塞の破壊者 = インドラ) よ。

adhiṣṭhāya guṇān sṛṣṭisthitisaṃhṛtikārīṇī /

nirguṇāpi guṇān etān adhiṣṭhāyātmavāñchayā // LT 3.9

cakram pravartayāmy ekā sṛṣṭisthityantarūpakam / LT 3.10ab

創造・維持・還滅を行う者〔であるわたし〕は、諸々のグナを支配し、また、グナを持たない者〔であるわたし〕は、自分の望みによって<sup>12</sup>、これら諸々のグナを支配する<sup>13</sup>。そして、唯一なるわたし (ラクシュミー) は、創造、維持、還滅 (終わりを形作るもの) の循環 (チャクラ) <sup>14</sup> を廻らす。

## Śakraḥ —

シャクラは〔質問した〕。

vidhāvayaṃ samāsthāya jñānādye tu yugatrāye // LT 3.10cd

śuddhetaravibhāgena kimarthaṃ tvaṃ pravartase /

vidhayor anayoḥ padme saṃbandhaḥ kaḥ parasparam // LT 3.11

さて、「知識」(jñāna) などの3つの組み合わせに2種の分類を当てはめて<sup>15</sup>、清浄とそれ以外 (不浄) との

区分によって、あなたが顕現するのはなぜか。パドマー（蓮華）よ。これら2つの分類において互いに結合（関係）するものは何か。

etat prṣṭā mayā brūhi namas te padmasambhave / LT 3.12abcd

私によってこれ（問い）を尋ねられたあなたは語れ。あなたに敬礼する。パドマサンバヴァーよ。

Śrī —

シュリーは〔答えた〕。

aniyojyaṃ mamaśvaryaṃ icchaiva mama kāraṇam // LT 3.12cd

わたしの「自在力」(aiśvarya) は抑制されないもの (aniyojya) であり、わたしの意欲こそが〔自身が顕現する〕原因である<sup>16</sup>。

muhyanty atra mahānto 'pi tattvaṃ śrṇu tathāpi me /

īśēśitavyabhāvena parivarte sadā hy aham // LT 3.13

偉大な者たちもこれについて誤解している。そのような真理を私から聞け。なぜなら、支配者 (īśa) と被支配者 (支配されるべき者、īśitavya) の状態として、わたしは常に顕現するからである<sup>17</sup>。

īśo nārāyaṇo jñeya īśatā tasya cāpy aham /

īśitavyaṃ tu vijñeyaṃ cid acit ca puraṃdara // LT 3.14

ナーラーヤナは支配者 (īśa) であり、そして、わたしは彼にとっての支配者性 (īśatā) であると知るべきである。一方、被支配者 (支配されるべき者、īśitavya) とは知 (cit) と無知 (acit) 〔の混合したもの〕であると知るべきである<sup>18</sup>。プランダラよ。

cicchaktis tu parā tatra bhoktrtām pratipadyate /

bhogyopakaraṇasthānarūpaṃ tasyā acitpadam // LT 3.15

さて、そこにおいて、最高処である「知としてのシャクティ」(cit-śakti) は享受者性 (bhoktrtā) を獲得する。無知 (acit) の境地 (pada) は、彼女の享受される (bhogyā) もの (upakaraṇa) としての状態である<sup>19</sup>。

anādyayā samāviddhā sā cicchaktir avidyayā /

mat pravartitayā nityaṃ cicchaktir bhoktrtām gatā // LT 3.16

ahaṃmamatvasambandhād dhy acit svenābhimanyate / LT 3.17ab

かの「知としてのシャクティ」(cit-śakti) は、常に、わたしによって促された、始まりを持たないものである無知 (avidyā) によって影響されたもの<sup>20</sup>である。〔その〕「知としてのシャクティ」(cit-śakti) は享受者性に到達する<sup>21</sup>。なぜなら、わたし (aham) とわたしのもの (mama) という関係により、無知 (acit) は、自己によって自己を認識するから<sup>22</sup>。

avidyā sā tirobhāvaṃ vidyayā yāti vai yadā // LT 3.17cd

cicchaktir nirabhīmānā tadā madbhāvaṃ eṣyati / LT 3.18ab

かの無知 (avidyā) が、知 (vidyā) によって、まさに消滅に向かうとき、そのとき、自己の認識から離れたもの (nirabhīmānā) である「知としてのシャクティ」(cit-śakti) は、わたしの状態にいたるであろう。

tām vidyāṃ śuddhamārgasthāṃ paravyūhādirūpiṇī // LT 3.18cd

pravartayāmi kāruṇyāj jñānasadbhāvarāśinī / LT 3.19ab

最高のヴェーハをはじめとするものであり、「知識」(jñāna) の本性 (正しいあり方) を見るものであるわたしは、かの知 (vidyā) という清浄な道 (= 創造) の段階を、恩寵により顕現させる<sup>23</sup>。

rakṣyarakṣakabhāvo 'yaṃ saṃbandho vidhayor dvayoḥ // LT 3.19cd

vidhā rakṣati śuddhādya rakṣyate ca vidhāparā /

etat te kathitaṃ śakra kiṃ bhūyaḥ śrotum icchasi // LT 3.20

この守護されるものと守護するものの関係は、2つの在り方として存在する。清浄などの在り方は守護し、そして、他方の(不浄などの)在り方は守護される<sup>24</sup> [ものである]。これがあなたに語られた。シャクラよ。さらにあなたは何を聞きたいのか。

### Śakraḥ —

シャクラは [質問した]。

īśitavyabhāvena kimarthaṃ tvaṃ pravartase /

īsitavyaṃ kiyad bhedam kiṃ rūpaṃ tatra me vada // LT 3.21

支配者 (īśa) と被支配者 (支配されるべき者、īsitavya) の状態として、あなたが顕現するのはなぜか。被支配者 (支配されるべき者、īsitavya) はどの程度区別され、そこではどのようなものか、わたしに語れ。

### Śrī —

シュリーは [答えた]。

svabhāvo nānuyojyo 'yaṃ mama nārāyaṇasya ca /

īśo 'ham īsitavyo na sa ca devaḥ sanātanaḥ // LT 3.22

これは<sup>25</sup>、わたしの自性とナーラーヤナの [自性] とには、関与していない。かの永遠なる神である支配者 (īśa) とわたしは、被支配者 (支配されるべき者、īsitavya) ではない<sup>26</sup>。

īsitavyaṃ dvidhā proktaṃ cidacidvyatirekataḥ /

cicchaktir bhoktrūrūpātra sā ca cidrūpadhārinī // LT 3.23

知 (cit) と無知 (acit) という2つの違いにより、被支配者 (支配されるべき者、īsitavya) は2種として言われた。「知としてのシャクティ」(cit-śakti) は、ここでは、享受者としてであり、そしてそれが知 (cit) の姿を持つ者である。

bhogyopakaraṇasthānair acicchaktis tridhā sthitā /

prasarantyaḥ trītyaṃ me sā ca parva smṛtaṃ budhaiḥ // LT 3.24

「無知としてのシャクティ」(acit-śakti) は、享受される (bhogyā) もの (upakaraṇa) の状態により、3種として存在する<sup>27</sup>。それ (「無知としてのシャクティ」) は、覚者たちによって、顕現しつつあるわたしの第3番目の段階と言われる<sup>28</sup>。

vibhakte api te ete śaktī cidacidātmike /

matsvāchchandyavaśenaiva mama rūpe sanātane // LT 3.25

また、まさにそのシャクティは、わたし自身の意欲 (mat-svāchchandyā) のみに従って、知 (cit) と無知 (acit) というわたしの永遠なる2つの形態に分割されている<sup>29</sup>。

cicchaktir vimalā śuddhā cinmayānandarūpiṇī /

anādyavidyāviddheyam itthaṃ saṃsarati dhruvam // LT 3.26

「知としてのシャクティ」(cit-śakti)は、汚れなきものであり、清浄であり、知(cit)からなる歓喜そのものである。このように、この始まりを持たない無知によって貫かれたもの(anādyavidyāviddheyam)<sup>30</sup>は、確かに、輪廻する。

acicchaktir jaḍāpy evam aśuddhā parināminī /

triguṇāpi mamaivedaṃ svācchandyāt pravijṛmbhitam // LT 3.27

また、「無知としてのシャクティ」(acit-śakti)は、同様に、理性なきものであり、不浄であり、転変するものであり、さらに「3種のグナ」[から成るもの]である。[しかし]まさにわたしのこれ<sup>31</sup>は、自身の意欲(svācchandyā)により、伸張したもの(遍く広がったもの=顕現したもの)である<sup>32</sup>。

dhūmaketur yathā dhūmaṃ dīpyamāno bhajet svayam /

śuddhasaṃvitsvarūpāpi bhaje sāham acidgatim // LT 3.28

燃やされる火が、自ずから、煙[の状態]をとることができるように、清浄なる「知識」<sup>33</sup>を自性とするもの(śuddhasaṃvitsvarūpā)であるかのわたしも、無知の帰趨(acit-gati)[の状態]をとる<sup>34</sup>。

anākrāntā vikalpena śabdair apy akadarthitā /

ādhyānopadhināpy evaṃ varte 'ham acidātmanā // LT 3.29

このように、私は、誤謬(vikalpa)によって覆われないもの(anākrāntā)、また、諸々の言葉(śabda)によって拒否されないもの(akadarthitā)<sup>35</sup>であるが、心に想起させる(ādhyāna)拠り所(upadhi)として<sup>36</sup>、無知のアートマン(acit-ātman)として、展開する。

bahirantaḥpadārthe hi citśvarūpam akhaṇḍitam /

viśiṅṣṭi tathāpy etac citrayopādhisampadā // LT 3.30

また同様に、壊れることのないこの知(cit)の本性は、様々な制限(upadhi)を持つことによって、外と内のものに<sup>37</sup>、個別化する。

svātantryam eva me hetur nānuyojyāsmi kiṃcana /

itthaṃprabhāvām evaṃ māṃ vidan buddho bhaviṣyasi // LT 3.31

わたしの自己の意欲(svātantrya、自己の独立性)のみが原因であり、わたしは誰かに支配される者(anuyojyā)ではない<sup>38</sup>。以上、このようにわたしの威光を認識しているあなたは、悟った者となるであろう。

## Śakraḥ —

シャクラは[質問した]。

kathaṃ sṛjasi vai lokān sukhaduḥkhasamanvitān /

asṛṣṭir hi varam yadvā sṛṣṭir astu sukhātmikā // LT 3.32

あなたはまさに楽と苦に満たされた世界をどうして創造するのか。創造しないことの方が良いのではないか、もしくは楽[のみ]を本質とする創造[の方が良いの]ではないか<sup>39</sup>。

## Śrīḥ —

シュリーは[答えた]。

anādyavidyāviddhānāṃ jīvanāṃ sadasanmayam /

saṃcitam karma saṃprekṣya miśrām sṛṣṭim karomy aham // LT 3.33

始まりを持たない無知によって貫かれている (anādyavidyāviddhā) 諸々の生類 (jīva) によって積み上げられた善と悪からなる行為を観察して、わたしは (楽と苦が) 混合した創造を行う。

Śakraḥ —

シャクラは [さらに質問した]。

kṣīrodasaṃbhave devi svācchandyam te katham bhavet /

karma cet samavekṣya tvam vidadhāsi sukhāsukhe // LT 3.34

乳海より生まれし女神<sup>40</sup>よ。もし、行為 (karman) を観察して、あなたは楽と不楽 (苦) を生み出すならば、あなたに自身の意欲 (svācchandyā) はどのようなものとしてあるのか。

Śrī —

シュリーは [答えた]。

kurvatyā mama kāryāṇi karma tatkarāṇam smṛtam /

kartuś ca karaṇāpekṣā na svātantryavighātinī // LT 3.35

行為 (karman) は、わたしの諸々の機能を果たすものとして、その手段 (動機) であると言われている。そして、行為者<sup>41</sup>と手段 (動機) の関係は、意欲 (svātantrya、独立性) を壊すものではない。

niravadyā svatantrāhaṃ nānuyogapade sthitā /

vibhaje bahudhātmānam kartṛkarmakriyādina // LT 3.36

非の打ち所のないものであり、独立したものであるわたしは、従属する状態にない。わたしは、行為者、行為、作用などとして、様々な自身 (ātman) を分割する。

līlayai kāraṇam nātra mrgyam evam sthiro bhava // LT 3.37ab

遊戯 (līlā) のために [創造が行われるのであって]、ここで原因は探求されるべきものではない。それ故、落ち着け<sup>42</sup>。

Śakraḥ —

シャクラは [語った]。

yadvā tadvāstu tad devi svātantryam te yadīdṛśam /

sṛṣṭiprakāram ākhyāhi namas te padmasaṃbhave // LT 3.37cdef

女神よ。それはそのようであるが、あなたの意欲 (svātantrya、独立性) が以上のようなならば、創造の種類を話せ。あなたに敬礼します。パドマサンバヴァー (=ラクシュミー) よ。

iti śrīpāñcarātrasāre lakṣmītantre traiguṇyaparakāśo nāma tṛtīyo 'dhyāyaḥ

以上、パーンチャラートラ派の精髓『ラクシュミー・タントラ』における第3章「3つのグナから成るものの明示」。

## 参考文献

### テキストと翻訳

Krishnamacharya, V. [Edited with Sanskrit gloss and introduction], 1959, *Lakṣmī-tantra: A Pāñcarātra Āgama*. Chennai: The Adyar Library and Research centre.

Gupta, Sanjukta [translation and notes with introduction], 2000, *Lakṣmī Tantra: A Pāñcarātra Text*. Delhi: Motilal Banarsidass.

### 二次資料

Abhyankar, Kashinath Vasudev and Jayadeva Mo. Shukla, 1977, *A dictionary of Sanskrit grammar*, Baroda: Oriental Institute, 2nd edition.

Rastelli, Marion, 2009, “Pāñcarātra” in Knut A. Jacobsen (ed.), *Brill’s Encyclopedia of Hinduism*, Vol. 1. Leiden: BRILL, pp. 444-457.

Schrader, F. Otto, 1916, *Introduction to the Pāñcarātra and the Ahirbudhnyā Saṃhitā*. Madras: The Adyar Library and Research Centre.

引田弘道 1997 『ヒンドゥータントリズムの研究』 山喜房佛書林。

三澤祐嗣 2013 『『ラクシュミー・タントラ』第1章訳註』『東洋大学大学院紀要』第49集, pp. 129-150。

三澤祐嗣 2014 『『ラクシュミー・タントラ』第2章訳註』『国際哲学研究』第3号, pp. 175-186。

## 註

- 1 第2章で示された6つのグナ（属性）、すなわち、(1) 知識 (jñāna)、(2) 自在力 (aiśvarya)、(3) 潜在力 (śakti)、(4) 力 (bala)、(5) 勇猛さ (vīrya)、(6) 光輝 (tejas) を示すと考えられる。
- 2 ここではシャクティの6つの属性の一つ、「知識」(jñāna) のことである。
- 3 6つのグナ（属性）のうち、「知識」(jñāna) が本質であり、それ以外の5つは付随するものということである。LT 2.26において、「知識」は形態 (rūpa) と説かれ、さらに、ラクシュミーの形態と同じ性質とされている。一方、「自在力」(aiśvarya) などの5つのグナ（属性）は特質 (dharma) とされ、LT 2.35で、その「知識」からの流出 (sruti) と説かれる。Krishnamacharyaによる註釈では、「『知識』(jñāna) は、本性（自己の形態）を観察する特質である。一方、その他の5つのグナ（属性）は、観察された本性（自己の形態）という副次的なもの (guṇabhūta) である、という意味である」(“svarūpanirūpako dharmah jñānam. anye pañcāpi guṇāḥ nirūpitāsvarūpāguṇabhūtā ity arthaḥ.” [Krishnamacharya 1959: p. 11]) と説明される。Guptaは「シャンカラチャーリヤは、ほとんどの場合、対象（事物）を nāmarūpaと呼ぶ。3つの経験的な制限は一般的に時間、場所、対象（事物）である。したがって、ここでは rūpaは一般的に対象（事物）について言及していると推定されう」と説明し、“rūpam”を “the essence of my being” と訳している [Gupta 2000: p. 16]。
- 4 Krishnamacharyaによる註には、「このように、区別 (vibhāga) もまた、まさにわたしの意欲 (icchā) によってなされることを言って、〈自己の意欲〉(“svasvātantrya”) というのである。」(“ittham vibhāgo ’pi madicchākṛta evety āha — svasvātantryeti.” [Krishnamacharya 1959: p. 11]) とある。Guptaは「ラクシュミーの完全な至高性は、ここにおいて、創造活動のあらゆる局面における彼女の完璧な独立性を断言することによって、強調されている」と説明している [Gupta 2000: p. 16]。このように、ここでは、ラクシュミーの独立性を提唱していると解することができる。
- 5 この分類はLT 2.49においても説かれ、そこでは自性 (svabhāva) と呼ばれている。これらの自性は、顕現しつつある状態で、原理 (tattva) の3種の区分とされる。残りの3つ、すなわち「力」(bala)、「勇猛さ」(vīrya)、「光輝」(tejas) は、LT 2.50において、3つのグナ (guṇatraya) と呼ばれ、続くLT 2.51で、知識 (jñāna) などの流出 (upasarjana) とされる。
- 6 ここでの創造は、LT 第2章の開眼 (unmeṣa) と呼ばれる清浄な創造とは異なるということを説明していると考えられる。LT 2.21; 22では、開眼 (unmeṣa) とは、海から月が昇るときのように顕現しつつある状態のことであり、わたし (aham) すなわちラクシュミーであり、ナーラーヤナのシャクティ (nārāyaṇī śaktiḥ) であり、創造のための意欲を特徴とするものであると説明される。Krishnamacharyaの註では、「〈別である〉(“aparāḥ”) [云々] とは。すでに、清浄な創造において、1つの開眼 (unmeṣa) が言われた。今、清浄ではない性質の3つのグナから成るもの (traiguṇya) の創造において、開眼 (unmeṣa) は別ものであるという意味である。」(“apara ity. pūrvam śuddhasṛṣṭau eka unmeṣa uktaḥ. adhunā aśuddhātmakatraiguṇyasṛṣṭāv anya unmeṣa ity arthaḥ.” [Krishnamacharya 1959: p. 11]) と説明される。
- 7 別の形態とは、サットヴァ、ラジャス、タマスからなる「3種のグナ」のことである。Krishnamacharyaの註では、「『知識』(jñāna) などの3種の形態は、サットヴァなどの3つから成るものとして、別様に作られたという意味である」(“jñānādītikarūpaṃ sattvādītikātmanā anyathā kṛtam āsīd ity arthaḥ.” [Krishnamacharya 1959: p. 11]) と説明される。
- 8 “āyam”は男性形であるが、“jñānam”を修飾していると解した。
- 9 Krishnamacharyaの註には次のようにある。「まさにそれを言って、〈そのように〉という。「知識」(jñāna) はサットヴァ性によって、「自在力」(aiśvarya) はラジャス性によって、「潜在力」(śakti) はタマス性によって生み出される、ということが意趣されている。」(“tad evāha — tadvad ity. jñānam sattvatayā, aiśvaryaṃ rajastayā, śaktiś ca tamastayā jātam ity bhāvah.” [Krishnamacharya 1959: p. 11]) という。このように、註釈ではサットヴァなどの「3種のグナ」によって知識などの3つが生み出されるとされるので、「3種のグナ」は原因や構成要素のようなものとして言及されている。また、知識などが「3種の

グナ」の性質を獲得していることに注目すれば、サットヴァ性などは獲得されるものとして考えられる。そのため、サトウキビの例にも照らし合わせれば、知識などが最初から「3種のグナ」を具備しているということであり、属性や性質のようなものとしても考えられる。しかし、これら「3種のグナ」が清浄であるあるはずの最高神の6つのグナのうちに本来的に備わっているのは不自然であると感じる。古典サーンキヤなどで説かれる通り、「3種のグナ」はプラクリティに帰される物質的なものと考えられるためである。ただし、ここでの創造は、第2章の清浄なる創造とは別のものであることが語られているので、知識などの3つの状態は、6つのグナを完全に備えた最高神の状態とは異なる（すなわちより顕現が進んだ状態）と考えられているのかもしれない。いずれにせよ、後の偈で語られるとおりに、創造、維持、還滅の3つの循環に結び付けられることを考えれば、知識などの3つが「3種のグナ」の性質を有することにより、現象世界の成り立ちに関与するようになると思うのが妥当であると思われる。

- 10 Krishnamacharya の註によると、「traiguṇya」（3つのグナから成るもの）とは、“cāturvarṇyam”と同じように、〔接尾辞 ya については〕本来の意味を保持した付加字としての“ya”である。（“traiguṇyam iti cāturvarṇyam itivāt svārthe syañ.” [Krishnamacharya 1959: p. 11]）と説明される。すなわち、“traiguṇya”とは“traiguṇa”と同様の意味ということである。接尾辞“ya”には3種類の用法がある。(1)「性質」という意味として、(2)「性質」特に「専門的職業」という意味として、(3)元の語と同じ意味として、用いられる [Abhyankar and Shukla 1977: p. 402]。ここでは3番目の用法である。すなわち“vaiśvarūpa”は“vaiśvarūpa”と意味的に異ならないということである。Aṣṭadhyaī 5.1.123-124 も参照。
- 11 ラジャスは「自在力」(aiśvarya) と結びつき世界の創造に関与し、サットヴァは「知識」(jñāna) と結びつき創造された世界の維持に関与し、そしてタマスは「潜在力」(śakti) と結びつくことにより維持された世界が還滅することに関与する。
- 12 Krishnamacharya の註では、以下のように説明される。「〈自分の望みによって〉 (“ātma-vāñchayā”) とは。これによって、世界の創造において、リーラー（遊戯）こそが目的（動機）であるということが言われているのである。次のように尊者バーダラーヤナは語った。『しかし、世間と同じく、単なる遊戯 (līlā) である』と (“ātma-vāñchayety anena jagatsrṣṭyādau līlaiva prayojanam ity uktam bhavati. yathāha bhagavān bādarāyaṇaḥ — “lokavat tu līlākaivalyam” iti.” [Krishnamacharya 1959: p. 11])。このように、注釈者は『ブラフマーストラ』III.33 を引用し、最高神の意欲を遊戯 (līlā) に結びつけている。
- 13 創造・維持・還滅を行う者 (srṣṭisthitisamhrtikārīṇī) とは、これらの循環を支配し、それらを超えた存在であることが示唆されている。また、グナを持たない者 (nirguṇa) とは、ここでのグナはサットヴァ、ラジャス、タマスからなる「3種のグナ」という物質的要素の機能を有するものであり、それを持たないということはプルシャの機能をも示唆している。Krishnamacharya の註には、「〈また、グナを持たない者〔であるわたし〕は〉 (“nirguṇāpi”) とは。すでに6つのグナに関して言われたことから、グナを持たない (nirguṇa) という語とはサットヴァ、ラジャス、タマスの形態 (性質) が混ざったグナから離れているという意味である」 (“nirguṇāpīti. pūrvam śāḍgunyasoktatvāt atra nirguṇapadasya sattvarajastamorūpamiśraguṇarahitety arthah.” [Krishnamacharya 1959: p. 11]) と説明される。これらはいずれもラクシュミーのことであり、本来ヴィシュヌが持つ最高神の機能がラクシュミーに帰されているのである。
- 14 循環とヴィシュの持物である円盤を掛けているのであろう。
- 15 おそらく、「自在力」(aiśvarya) に創造とラジャスを、「知識」(jñāna) に維持とサットヴァを、「潜在力」(śakti) に還滅とタマスを対応させていることを示していると思われる。
- 16 ラクシュミーは、「自在力」(aiśvarya) により、妨げられることなく、思いのままに世界を創造し、彼女が創造の意欲を起こすことにより、世界は始まるのである。LT 2.24 には、ラクシュミーは妨げられず、抑圧されない「自在力」(aiśvarya) が、満ちあふれていると説かれる。また、LT 2.28 において、生起する (udyati) ラクシュミーが妨げられないのは「自在力」(aiśvarya) のためであり、また、それは意欲 (icchā) であるとも説かれる。Gupta は、「ここでの aiśvarya は、その語がラクシュミーの本質的な性質として使用されているので、神的属性の2番目を意味してはいないであろう。それ故、このコンテキストにおいて、aiśvarya は、彼女の本質を構成する6つの属性の集合を示している」と説明している [Gupta 2000: p. 16]。しかし、LT 2.28 の説を鑑みれば、この偈では単純に6つの属性の2番目である「自在力」(aiśvarya) の性質について説かれていると考えることもできるであろう。
- 17 支配者 (īśa) とは清浄な創造の段階で、ラクシュミー・ナーラーヤナの状態である。一方、被支配者 (īśitavya) は不浄な創造の段階である。Krishnamacharya による註釈においては、「清浄とそれとは別 (不浄) の創造の2つの関係が言われて、支配者と被支配者 (支配されるべき者) という。守護されるべきものと守護するものの状態という意味である」 (“śuddhetarasrṣṭyoḥ sambandha ucyate — īśeśitavyeti. rakṣarakṣakabhāva ity arthah.” [Krishnamacharya 1959: p. 12]) と説明される。一方、Gupta は「最高神の本質、すなわち最高の真実 (最高原理) としてのラクシュミーは、おおむね未分化のブラフマンと同一である。次の段階において、〈最高神〉と〈彼の本質〉は、顕現した属性すなわち、ラクシュミーとナーラーヤナで表された神的実在と最高精神として区別される。次の段階では、最高神は創造の内にあるけれども、それを超越している。超越者としての彼は Īśa (支配者) であり、一方、内在者としての彼は支配された (宇宙) すなわち Īśitavya である」 [Gupta 2000: p. 16] と説明し、支配者 (īśa) の位置づけがはっきりしていないように思われる。
- 18 支配者 (īśa) と支配者性 (īśatā) の対応は、LT 第2章で説かれた清浄な創造の段階における「わたしという実在」



- (ahamartha) と「わたし性」(ahamā) の関係に対応すると考えられる。そして、被支配者 (īśitavya) は不浄な創造の段階であり、知 (cit) と無知 (acit) の 2 種からなるのである。Gupta は「このように、同じ原理が、主観的であると同時に客観的である世界に展開する。主観的創造としての最高の意識原理はその意識的性質を保持しているが、しかし、客観的創造としてのそれは物質に変化する」と説明する [Gupta 2000: p. 16]。
- 19 被支配者は 2 種からなるのであるが、それぞれが、知 (cit) : 「知としてのシャクティ」(cit-śakti) = 享受者性 (bhoktrā)、無知 (acit) : 「無知としてのシャクティ」(acit-śakti) = 享受されるもの (bhogyopakarāṇa) ということである。
- 20 すなわち、揺さぶられたもの、促されたもの、または刺激されたものという意味である。
- 21 無知 (avidyā) によって影響された「知としてのシャクティ」は享受者性を獲得するという事。
- 22 享受者として確立するには、自己とそれ以外を区別しなければならない。自己とそれ以外の区別が曖昧であれば享受者と享受されるものの関係は成立することはできない。すなわち、享受者である主体と享受されるものである対象の関係である。対象があるからこそそれを受け取る主体が必要であるし、逆にまた主体があるからこそ対象は成立するのである。そして、その最初のものが「わたし」と「わたしのもの」の区別である。自己によって自己を認識するとは、すなわち、わたしである主体から享受されるものとしての対象が区別されると言うことである。このような無知 (acit) の機能はアハンカーラの機能を連想させる。MBh 12.291.21 にはマハットの誕生を「知の創造」(vidyāsarga)、アハンカーラの誕生を「無知の創造」(avidyāsarga) と説く。用語は異なるが、このようなアハンカーラのイメージを踏襲しているのかもしれない。一方、Gupta は “That conscious element (citśakti), influenced by beginningless nescience (avidyā) which is introduced by me, becomes the enjoyer and, on account of its own ego-hood, identifies itself with non-conscious objects in terms of the relationship I and mine.” と訳す [Gupta 2000: p. 16]。
- 23 LT 3.16-19 は前後関係が不明瞭で、内容が入り乱れている。まず知 (cit) と無知 (acit)、知 (vidyā) と無知 (avidyā) の関係について説かれるが、その後に唐突に恩寵による顕現について語られる。Gupta は “That (absolute) knowledge present in the pure course (of creatoin) is introduced by me as the supreme Vyūha, ...” と訳し、「この文は混乱していて、無関係であるように見えるが、最高神と彼の Śakti の究極的な本質を弟子に思い起こさせるためにここに置かれている」と説明している [Gupta 2000: p. 16]。
- 24 13 偈の Krishnamacharya の註釈にある通り、守護するものは、清浄な創造の段階であり、支配者 (īśa) である。一方、守護されるものは、不浄な創造の段階であり、被支配者 (īśitavya) である。
- 25 支配者 (īśa) と被支配者 (īśitavya) とが区別される状態のこと。Gupta も参照 [Gupta 2000: p. 17]。
- 26 この文章は乱れているため、意味が判然としない。「わたしは支配者 (īśa) であって、被支配者 (īśitavya) ではない。かの永遠なる神もまた」と訳すことも可能であるが、ラクシュミーであるわたしが、支配者 (īśa) であるのは不自然であり、支配者 (īśa) は男性形であるから矛盾が生じる。また、「わたしは支配者 (īśa) でも被支配者 (支配されるべき者、īśitavya) でもない。かの永遠なる神もまた [同様である]」と訳すこともできるかもしれない。Gupta も “The eternal God and myself do not (really possess the aspects of) Īśa or īśitavya.” と訳している。しかしこの場合、支配者 (īśa) はナーラーヤナ、支配者性 (īśatā) はラクシュミーと同定される LT 3.14 の内容と矛盾してしまう。おそらくこの偈では、被支配者 (īśitavya) は、不浄な創造の段階であるため、清浄な創造の段階であるラクシュミー (わたし) とナーラーヤナは直接に関係していないということの意味しているのであろう。
- 27 LT 第 5 章では、物質的創造が 3 種類において説かれている。このことを指している可能性もある。
- 28 第 3 番目の段階とは何を指しているのであろうか。まず考えられるのは、1 番目は支配者 (īśa) と支配者性 (īśatā)、2 番目が被支配者 (īśitavya)、そして 3 番目が「知としてのシャクティ」(cit-śakti) と「無知としてのシャクティ」(acit-śakti) である。あるいは LT 第 5 章の物質世界の創造の第 3 番目と関連しているかもしれない。
- 29 Gupta は、「これらのシャクティは、一見すると、異なるものとして認められるが、基本的にそれらはまったく同一のシャクティである」と説明し、第 4 章を参照するよう指示している [Gupta 2000: p. 17]。
- 30 おそらく不浄な創造の段階にあるものであろう。LT 3.16 も見よ。Gupta は、“Influenced by beginningless nescience it ...” と訳す [Gupta 2000: p. 17]。
- 31 “idam” は中性名詞であり、何を指しているのか不明である。文法的に合わないが、知としてのシャクティか無知としてのシャクティ、あるいはシャクティそのものを挿しているのかもしれない。
- 32 Gupta は “... yet I voluntarily manifest myself as such.” と訳す [Gupta 2000: p. 17]。
- 33 samvid = jñāna と考えられる。LT 3.2: 8 を参照。
- 34 Gupta は “bhajet” を “produces”、“bhaje” を “assume” と訳している [Gupta 2000: p. 17] が、両方とも「〔の状態〕をとる」と訳した。火が自ら生み出した煙によって煙の性質を帯びること、そして同様に、本来清浄であるものが、不浄なものへと変化するが、それによって、清浄であるものもまた、不浄なものの性質を帯びることである。Krishnamacharya による註釈では、「炎 (jvalana) の本性である火 (煙の印を持つもの、dhūmaketu) も、汚れた煙の性質を受け取るように、そのように、無知 (ajñāna) の自性であるわたしも、無知 (acit) の状態になって、という意味である」

(“jvalanasvabhāvo ’pi dhūmaketur yathā malinadhūmarūpatām pratipadyate, tathājñānasvarūpāpy aham acidbhāvam āpadya ity arthaḥ.” [Krishnamacharya 1959: p. 12]) と説明されている。

- 35 すなわち、すべての言葉によって確認されている、ということである。
- 36 Krishnamacharya による註釈では、次のように説かれている。「〈心に想起させる拠り所として〉(“ādhyānopadhina”)とは、『わたしの意欲としての制限によって』という意味である。あるいは『瞑想の拠り所のために』という意味である。次のように言われる。『瞑想という平安の場所である』(“dhyānaviśrāmbhūmayah” LT 4.24) と ] (“ādhyānopadhineti. madicchārūpopādhineti arthaḥ. dhyānāmbanārtham iti vārthaḥ. yathā vakṣyati — ‘dhyānaviśrāmbhūmayah’ (LT 4.24) iti.” [Krishnamacharya 1959: pp. 12–13])。これに関して、Gupta は、「編者は “ādhyānopadhi” に2つの説明を与えている。1) 制限としてのわたしの意欲、2) わたしを心に描くために必要な制限。最初の方が妥当と思われる。」と説明し、“voluntarily” と訳している [Gupta 2000: p. 17]。しかし、“ādhyānopadhi” には意欲というような意味は見出せず、2番目の方が妥当と考えられ、そのように訳した。
- 37 Gupta は外を無知 (non-conscious) の創造、内を知 (conscious) の創造に当てはめている [Gupta 2000: p. 17]。
- 38 おそらくこの偈は、30偈で制限されると説かれたため、知 (cit) が制限されるのであって、女神は本来的に制限されるものではないということを説明するために説かれているのであろう。Gupta の訳では、“Such limitations are imposed by my own (divine) sovereign (will) and I am subordinate to none” というように、“Such limitations” を補っている [Gupta 2000: p. 17]。
- 39 Krishnamacharya による註釈には、「〈創造しないこと〉(“asṛṣṭih”)とは。ここにおいて「そして、慈悲 (anukampā) に促されたものは、ただ楽のみを創造すべし」という『シュローカヴァールツィカ』の言葉が思い出されるべきである」(“asṛṣṭir iti. atra “sṛjec ca sukham evaikam anumāpāraditāḥ” iti ślokaḥ” [Krishnamacharya 1959: p. 13]) と説かれる。
- 40 LT 1.30–32 を参照。
- 41 “kartṛ” について、Gupta が “a creator” と訳しているように [Gupta 2000: p. 18]、ここでの行為者とは創造者のことであろうか。2.46cd; 47ab において、わたし (ラクシュミー) が作者性 (kartṛtva) を自らに獲得する状態がプラディユムナであると説かれており、その作者性 (kartṛtva) は創造者の性質であると考えられる。これに従えば、ここでも同様に、“kartṛ” に創造者の性質を認めることはできるのであろうが、単純に行為者としても考えられる。
- 42 32偈から37偈のこの一連の問答は、インド思想に横たわる根本的問題を孕んでいる。32偈では、まず、楽と苦がある世界をどうして創造するのか、楽のみの世界を創造するか、そうでなければ創造しなければ良いのではないかと問われる。それに対する回答として、33偈では、善と悪があるから、楽と苦のある世界を創造するという、ある意味単なる現状説明にすぎない回答がなされる。そこでさらに追求して、自身の意欲により創造しているのではないのか、いったいどこに自身の意欲があるのか、自身の意欲によってではなく、創造させられているのではないかとの問いが投げかけられる。そこで、自身の意欲は行為によって影響されることはなく、また、独立したものであり、何ものにも従属することはないと説明し、最終的に遊戯 (līlā) が原因であるとして、この問答を締めくくる。このように、清浄であり、恩寵を持つ最高神が、どうして苦の世界を創造するのかという問いに対する説明として、最終的に最高神の遊戯 (līlā) として問答を終わらせてしまうのである。

## キーワード

ヒンドゥー教、インド哲学、タントラ、パーンチャラートラ派、『ラクシュミー・タントラ』